

図書紹介

宮寺晃夫 著

『教育の正義論 —平等・公共性・統合—』

羽根田 秀 実*

『教育の分配論』（勁草書房、2006年）刊行直後から、次の著書の公刊が待たれたが、この度我々は、『教育の正義論』（勁草書房、2014年）を手にすることができた。本書は、「はしがき 教育の正義／正義の教育」で著者が述べるように、焦眉の社会的、政治的問題を念頭に置いて書かれた“時論”としての性格をおびている。これらの“時論”を書かせたのは、教育の自由化・教育の個人化が社会を席卷し、教育の平等が突き崩されつつあるという著者の認識である。著者は、このような方向に進もうとしている教育の在り方を問い質すことによって、教育に正義を取り戻そうとしている。

本書は、三部構成であり、それぞれ「Ⅰ部 平等と教育」「Ⅱ部 公共性と教育」「Ⅲ部 統合と教育」となっている。

現在の生涯学習システムは、努力しない者の排除を正当化するように機能しているように見える。つまり、早期の努力の諦めは、個人の意思によるものであるとされるのである。しかし、自発的な努力の諦めが、個人の責任ではなく、階層という環境要因に規定されたものであるとするならば、その社会的な補償や支援を政策に求めていくことができるであろう。しかしながら、その補償や支援は、平等な機会（形式的平等）を実現するという方策によっては達成されない。というのは、平等な機会（形式的平等）は、これを有利に利用できる階層のみを利することになるからである。したがって、平等主義の教育政策が目を向けなければならないのは、努力性向きえ奪われてしまう階層の人々なのである。まさにここにおいて、公正な社会を目指す社会政策の出番が求められるのである。（Ⅰ部 第1章 平等主義の政策課題 （1）努力の規定要因は何か）

公共性は、市民の教育要求を結集していく原理（みんなでという「共同性」）と

*北海道教育大学

いうよりは、むしろ、市民の要求が特定の階層の利益に集約されていくことがないように、運動をつねに多様な他者の存在（誰に対しても）に開いていく原理である。

しかし、私たちはいま、私事化と分権化の名のもとで、国家が個人の自己利益を代弁してくれる時代に生きている。この時代に、市民的公共性を持ち出しても、それは、個人の自己利益に対抗する理論としてもはや有効性を持ちえない。そのようななかで、市民の間で合意形成を図っていくための手続きとして提案されたのが、「公共的な理由」論である。これは、人々が主張を述べ合うとき、裏づけとなる理由を、しかもそれが反対者の側からも受け入れ可能であるような理由を添えることを求める、というものである。

公共圏が消滅し、誰もが自己利益のみを求めているような時代にあって、もう一度、わたしたちは自己利益を互いに他者の立場から検証し合うことを通して、公共財としての教育の分配に対して責任を分け合っていくこと（公共性を取り戻すこと）が必要である。（Ⅱ部 第四章 教育にとって公共性とは何か）

教育を受ける機会は、どのような供給方式をとっても、形式的には平等に保障される。しかし重要なのは、子どもが誰とともにその機会を活用するかということである。この教育機会の実質をできるだけ無作為に平等化してきたのが「統合」である。これは、義務教育においては、校区制によって維持されてきた。

しかし、学校選択制の導入や私立校への進学が、この校区制の空洞化をもたらしている。このようななかで、統合学校維持のための新たな仕組みの一つとして、著者は「学校の自由選択制」を提案する。これは、従来の学校選択制とはちがって、結果として行かないことになる学校に対しても、親たちの共同責任を果たさせ、学習組織の実質的平等を学区全体で確保することを保証するようなものとして構想されている。

教育機会の個人化の傾向が強まるなかで、統合化への道筋を付けるには、機会均等の原則を墨守しているだけではすまされない。機会の実質の平等にまで踏み込むことが必要になる。そうすると、教育機会の自由な取得に制約を加えることになるが、果たしてこれは正当性を持つのかどうか問われることになる。この問いに対する回答がいま求められている。（Ⅲ部 第七章 「正義」と統合学校の正当化）

本書は、“時論”としての性格をおびたものであると著者は言う。確かに、扱わ

れている問題は、現代に生きる私たちにとって、クリティカルなものばかりである。しかし、それらの問題の論じ方は、教育哲学者として、きわめて冷静で根本的根源的（ラディカル）である。鍵概念の鍛え直し、精緻化を通して、問題の本質を闡明していくプロセスは、知的興奮に満ちている。会員諸氏には、教育哲学者として新たな教育哲学研究の領域を切り開いている著者の論考を、ぜひ手にとってお読みいただきたい。

宮寺晃夫著『教育の正義論 ―平等・公共性・統合―』

勁草書房，2014年，3,000円（税別）